

緒言

泥海古記は天理教發祥の嚆矢である。天理教の淵源であり、天理の教發展の原動力である。お道の人にして泥海古記を耳にせぬ人は斷じてない。お道に奉ぶものにて泥海古記を知らぬことはそれ自體でお道の人ではない。これを會得しなくては世界一列たすけの大本願を會得するわけには行かん。

泥海古記を眼に結めないと一死たる實たるの神様がわからない。御教祖様の御存在が分らない。お地場の大義が分らない。布教の實がわからない。たとへばみかぐら歌も、お筆先もみな泥海古記を根としたる實である枝葉である。

かかる大切なるものが今日まで表に彰れなかつたのは亦一歴のわけがある。泥海古記は形態は全然嘘へばなしである。御教祖様の口から我等の耳に直に聴くとき、凡そ誑妄といふものにはいふにいへぬ理解と力と味とがあるゆゑ、賢慮として申さ

れる方と聽くものとの心が、びつたりとあふ。それで電氣が傳はるやうに、そのまゝそつくり聽手に向つるものである。ところが是が一旦書きものになるとさうはゆかぬ。譬喩を實體として解したくなる。書き手の文字が又混り込むけれど、之を混り物と斷定する資料がなくなくなる。譬喩は知らぬ者に知らぬことを教へる場合、その聽手の持つてゐる知識を集めて之を基にして大體の見當をつけさせて、實、本を心中に齎させるためのものである。例へば日本古神道にも伊弉那神が夜見の堅洲國に逃れるときに大きい龍蛇に化つたとある。また伊弉諾神がそのとき矢に化つて忍ばれるともいつてある。これは大龍のやうな勢、矢のやうな速度を如實に示してあるわけである。

泥海古記でも、さうである。大龍とか大蛇とか、蛟、鱘、鱈、鯨、鱒、鱣、白蛇、黑蛇、龜、鱉、人魚などに譬へられてあつて、その觀念より本體の屬性を心中に想像させて頂くためである。これが從來はそのまゝに現在の動物のやうに考へるから、いは、お伽噺としてみるべき形をその意の實までにあてはめやうとすゝ傾向があつた。勿論お噺としても中々滋味の溢れたものである。併しこれを哲理とみて始めて本神論の醍醐味が會得出来るのである。

それで形は形として、その形をたよりに實體を考究せねばならぬ。然るに今までお道の信者にも動もすれば、この様な混同があつたものである。信仰が勢強いほど、それ丈けにかゝる觀念錯誤混合の危険があつて、その始めの折角ありがたい御本旨が下駭なものと埃まみれになつてしまふ虞があつたからである。

もう一つの理由は、元質たる神さまの十全十章の御守護を説いて下されるのに、分りやすくいふためにこの屬性を一柱づゝの神名を以てその活動に報いられてある。その神名がこれも聽手に多少聯想のある神名であつて、そのなかには日本古神道の神話に出てくる神名もある。例へば「ぐにとこたち」の命とか「おもたる」の命とか「いざなぎ」の命とか「いざなみ」の命とかなどである。それでかゝる神名は信徒にしても小學校でまづ第一におほえた神話の中の神様であるために、やゝもすれば日本古神道の一存在としての御活動と、この泥海古記の御名における御性質とを一緒にしてしまふ危険がある。況んや天理教につき教理もなにもまだ知らない一般の人士には之の神名を用ひてあるがために混同してしまふ。混同するのではない、區別を知らないのである。例へば婦人の名前に「節子」とい

ふのがある。畏き御方様にもあれば尊き妃殿下の御名にもある。この御名自體がよい名であるから下々一般にも同じ文字の名が中々多い。假に茲に類の少ない名があつて、その名が先に一般に知れ渡るときは、他の人が同名でも先の一般に知れてゐる人の事を指しているものと思ひ込んでしまふものである。それでは不都合であるから、右の婦人の名についていへば、節子の文字を勢津子ともかきなほして原字の感をつたへ、また「せつ」子ともかき、或はそれを讀みかへて「さだ」子と稱へることもある。

この天理創生神話に、たとへば「いざなぎの命」「いざなみの命」といふ神名がある。これは結構な名稱である。しかし、それは日本古神道の御神の御名稱と同じであるゆゑ、之を「伊弉諾尊」「伊弉那尊」とか、ずに本教のは「いざなぎのみこと」「いざなみのみこと」とかく。これが本統である。従來假名では文字の中に入るときに體裁がそるはぬことを中々氣にした時代があつた。それでこれを「伊弉奈岐命」「伊弉奈美命」とかいた。天理教典に日本古神道の文字を用ひてゐるのは當時「神道天理教會」といふものを政府で認められてゐる必要があつたので、この漢字も亦本教獨立伸展の第一階に入るための必要用語として

して意義があつたわけである。この文字より來る日本古神道の神様のおはなしと同一であるとするより外にはその當時の役所ではわからなかつたからである。他の神名も亦同様である。今は一般には難しい日本書紀の用字をさけて前述のあて字を用ひてゐる。

右の理由によつて此の泥海古記を一般に發表することが難しくなつてゐるわけである。今日は信徒内でも又世上でもかゝる誤解を扶む管見者獨斷者がなくなつて來た事は世界のため本教のために共に慶賀にたへぬ次第である。それで茲に返すがへすも申上げた事はこの泥海古記は日本古神道はじめ同種在來の思想、宗教、神話、物語、などと獨立したる神様——御教祖——の創作である。その間に何の、プロットの上でもコンストラクションの上にも聯系のないものであるといふ事を忘れてはならぬ。唯々至純至眞の白紙の態度になつて、この泥海古記を研究せられんことを切望する。

この要望が近來頗に、本教教勢進展とともに、殷になつて來た。先に某先生の筆寫と稱して某社より叢書の一として泥海古記の寫本が發行せられてゐる。これは勿論本教の正本として發表を認められたものではない。それを見ても所謂寫本といひ條、實に寫し違ひに

や、補註の混入にや、一見本文正冊であると信じられぬ所が少くない。それを原本そのままと銘打つて發表せられるのは、理、如何に之を要望するとはいへ、テキストと信じさせるやうにして、かゝる手段に出づるといふ事は、當を得たものではないやうに考へられる。これによつても、つくづく正冊の紹介が必要となつたのを痛感した。

私が正冊と稱するのは御本部の原本をいふ。私が先年ロンドンにゐるとき、ロンドンに於ての『ひのきしん』として力かぎり妥當な英語の「みかぐらうた」の譯出に従事したとき、本教の元本たるこの泥海古記の英譯にも、とりかゝつた。その原書として御分家中山爲信先生より自ら本部原本より筆寫して下附下されたものである。私としてはこれは信憑することが唯一のみちであり唯一の信頼である。故に正冊と申すわけである。

泥海古記の魁望は一般にかくも緊切になつてゐる。しかし、前に述べたとほりの誤解があつては、たとひそれが千萬中の一人の誤解であつても御教祖様に對し即ち天理王命様に對して申しわけがない。併し「とひらひらいて地を平さう」と仰せられた獅子吼を極得して之を敢行する以上は、十分その用意をせねばすまぬ。それでこの泥海古記を發へねばな

らぬ。前申すとほり之は口授であるから、敘述に相前後してゐる處がある。口授であるがための重複もあれば言外の了解もある。これを書きものとなれば整理せねばならぬ。また時には本文の筋の中に、大きい註釋となつて編み込まれてゐるところもある。それでこれを別にして節項を設ける方が、よむ人にはわかりよい。これが私の編と申して責任を明かにした所以である。

原本に録して、出來る文は本文には符筆をせぬことにした。そしてこれを補ふには、原註として本頁の下半に之を記入することにして、私の責任を以ての註釋を示して、少くとも私の關するかぎり純正にして適當なりと信じたる考へを表はすことにして諸子の御參考に供することにした。之の點に於て私の著である。この故に本書を泥海古記付註釋岩井尊人編著と題したものである。口授筆寫の原本を整理したのが編であり之に註釋したのが著である次第である。

教理天理の觀得悟得は各人の自由用である。「さとり多様十二様」と仰せある。その何れによつても悟堂得信あれば、それで神様は「かはい、我子」の孝行としておうせとり下

泥海古記附註釋

岩井尊人編著

第一章 古記ばなし

此の世の元なるは泥の海人間もなく世界も無く、たゞ泥の海ばかり。その中に龍と蛇とがゐりました。

その龍といふのは頭一つ、尾一筋の大龍であります。蛇といふのは十二の頭、三劍の尾の大蛇であります。

一、泥の海とは、泥のやうな海のやうな所といふ意。即ち在るといへばあるないといへばないやうな、それでも何かあるが、何といひあらはず事が出来ぬ存在である。高、深、底もなし、渾沌として透明やら不透明やら皆目わからぬもの、謂である。

二、龍のやうなもの、蛇のやうなもの。勿論、龍とはいへ大も無限厚さも無限なれど、まづ上下といへばいへる方向で、その中心が今日の北極星の近くの北極位にあたる。蛇といへば、無限の大存在なれど、まづ左右前後といへば、いへる方向に亘つてゐて、その

神といふのはたゞ右の大龍、大蛇のすがたとおぼしき二神おはすばかり。是れ天の月さま日さまとあらはれ給ふ御神にて、此の月さまといふは「くに」とこ立ちの命と申す男神様であります。日さまといふは「おも足る」の命と申す女神様であります。

月日二神というて居たとて敬ふものは無し。何の樂しみも無い。それで月さまが、いっそ人間を拵へようと思ひつき遊ばしました。人間を拵へて其の上世界を創定して、そしてその人間に神が入り込んで守護すれば、人間といふものは重寶なもので、どんな眞似でも出来る

もの、陽氣あそび、そのほかの何事も見られることゝて、之の事を日さまに御相談ありました。

そこで日様は如何にも結構でござりますと御賛成になり茲に御相談が定まりました。

そこで月さまは「くに」の「こ」をお立ちあそばしたなれども、何も無し、たゞ泥の海ばかりであります。

それから人間を拵へるには、種子、苗代の道具、雛型がなくてはならぬゆゑ、その道具、雛型を見出さうと、月日の二柱の神様が泥の海をお見澄ましあそばされました。すると岐魚或は人魚ともいふ魚がある。

中心が今日の南十字星の近くの南極位にあたる。この二大存在が泥の海のすみすみまで行渡つてゐるわけである。
三、正冊には直に「神といふは唯月日一神のたばかり」とあり大龍と大蛇との關係の説明が省かれてある。此の世の元始における元、實のおやさまの存在は泥の海の姿であつた。併し人間の考への廻り廻るところ、神様の屬性御本質即ち御性質と御はたらきとを判りやすく示現下された點までである。泥の海自體を見ますと、それが龍とみえると同時に對立して蛇とみえて柱に一双となる時、始めて人間の考へに入つて来る。「無い」といふのは「有る」に對して謂ひ、絶對とは相對といふ考を相俟つてしか考へられぬ。人間といつても男か女の姿を中心に描かねば人間といふものを説明出来ない。神言に「二つ一つは天の理」とある。それでこの根本兩神即ち兩屬性を「月日」と申されてゐる。「月日の神」と

あるはこの原現双守護を申されてゐるのである。この根本兩屬性より夫れ／＼更に五屬性を詳にし十全十合して明白に「元寶の神」の理が顯現せられるので、お話としては順次に演釋せられてゐる。さうでないと申述べることも出来ないからである。外冊には「獨化(ひとりなる)神」とある。私には神名をやさしく「たち」「たる」さまと申す。
四、正冊には次の句に性別を説明してあるが統制上之に入れた。
男女神といふも相對、即ち能動受動を表す文で性別ではない。縱と横、北と南、左と右といふと同様、幾何學でいふ正、負の意味。
五、學ぶこと、仕事。
六、外冊には遊山とあり
七、正冊には「よろしうござります」とある。大和地方の用語で如上の意味である。
八、ついで下の本文註がある。「此

その姿心を見て之を引寄せて人間拵へる苗代にこの身體を貰ひ受けたいと、兩神が御相談あり、直ちにその相談が定まりました。それで右二つのものを引よせられまして、このものに仰せられるには此の度いよいよ人間といふものを拵へたいについては其方の心姿を見澄して、人間の種子苗代に貰ひ受けたいと御談じ込みになりました。

それを聞いて始めはしりごみしましたが、前のとほり樂しみづくめの話を聞かせて是非にと懇ろにお説きになつたので遂に承知することになりなりました。それでその身體を貰ひうけ

て茲に種子苗代が出来、いよいよこれで人間創造の種子苗代の用意が出来ました。是て根本の雛型が揃ひましたなれども人間完成のためには人間五體の道具また魂の雛型が無ければ、どうもならぬと、御相談になりました。そこで兩神がまた泥の中を見澄まされま

すと、鯉ほこといふ魚がある。此のものは川では鯉の肥えたやうなもの、勢強く、しやく張ることの得手なものであります。此の魚を見澄まされまして、どうぞ其の身體を此方へ呉れ。さる代りには元の屋敷に連れかへり、萬劫未代陽氣遊びをさせませうと樂しみ

氣おくれを表してあると解する。
一四、正位敘述では先づ人魚を見澄し出して之を人間の種に用ふる事と説得し、次に白蛇を見澄し出して、兩者を一行に呼びよせて説得せられる順序となつてゐる。故人魚については先に既に説得済みである以上重複のやうにも考へられよう。又、外冊には月日の兩神夫々北、南位にあつて兩者を同時に見澄し出されて同列に、種苗代になるやうにと説得せられてゐるやうである。哲理上の教理観ではこの兩屬性兩守護のみならず十全屬性の實示である以上それは問題でない。しかし説話として敘述に順序なしでは話が成立たぬ。即ち依て、次のやうに解すべきである。即ち先づ人魚次に白蛇を召し、先づ人魚を説得し、次に種苗代を不可分の關係ある故、兩者同列に召出して白蛇を主として苗代となる様と語あり、種子の役はこの人魚が勤めてくれるといふ次第を懸念し給うたのである。

一五、このものとはこの場合兩者を指されてゐると讀むことが出来る。しかし前註十四のとほり、此の場合には苗代たるべき白蛇に直面して仰せあるものと解する。
一六、「種苗代」とあるは、正に兩者に對して一時に申されてゐるのであり、白蛇にしてみれば「種の苗代」となつてくれとの申入れと聽いてゐる次第である。この場合人魚には交渉済み故、只の副としてきいてゐるわけである。即ち「種の苗代」とあるやうに讀んでもよいわけである。
一七、この以下は正に、白蛇に苗代の役を引受けよとの交渉である。この種の交渉は人魚に對しては既にすんでゐる。
一八、之の「鎮の文句に當る正位上の基礎はないが讀物としての構成には聯絡上挿入した、在來の創世神話には天地草木が出来てから人間創造に入る様になつてゐるが、天理神話では、かく

になりました。

これで人間創造の種子苗代に性が入りました。その道具が出来上りました。

それから人間飲み食ひの道具雛型には何を以てすれば良からうと泥の中をよく見澄されますと饑がある。

それでこのうなぎを見すまされましてどうぞ其の身體を此方へ呉れ。さるかはりには元の屋敷へ連れかへり萬劫末代陽氣あそびをさせませうと樂しみづくめの話を申し聞かせて得心させて貰ひうけ引きあげ食べて味心を聞はしました。

うなぎは持たれるとづるくと後部からも頭部からも出入りするもの、また勢の強いものゆゑ之を人間の飲み食ひ食物の出し入れの御守護となされました。

これで人間飲食の守護人間五體養ひの守護が出来ました。

それから人間の息吹き分け風を以て言をいはせる道具には何にしてよからうかと泥の中をよく見澄されますと鱧といふ魚がゐます。

このものは身薄いもの、そして味よきものでもあります。凡そ球いものや角のあるものでは風は出ず薄いもので煽げば風が出るものゆゑ

三二、風すなはち、空氣の流動で發聲する言葉の事で、人間呼吸と不可離の干渉である。

三三、「正冊には「丸い」とある。この意は「ぶあつもの」として球形を仰せられたので、平面圓形ではない。角もまた立體的で角の張つたもの、例へばさへとか柁とかいふやうなもの、意で、之れでは風を立てるには適當でない。つまりソリツ下の (SOL) のものでない意である。

三三、「物言ふ御守護」にあたる辭句正冊に省かれてある。

三四、正冊に之に續いて「これで六だ、い始まる」というて、道具揃うた」とあるが、古配の筋筋に外れる註にてあり又、研究に深入りする故之にふれず。

三五、「出直す」とは、現世より云へば「死ぬ」ことである。この世を「さよなら」して次の新生涯に出なほし再度發足 (リスタート take) することである。此の世よりみれば出直し、あの世

よりみれば新生である。廣く考へるとこの世に生れ出づるのも前生よりいへばこの世への出直しともいへる尤も「出直し」の辭は主に、現世より次世に入ることを指して用ひられてゐる。

三六、これより以後正冊にはこの「泥の中」といふ句省れあり、話の簡捷のためと考へられる。恰度「兩神」が見澄されるのであるが、この「兩神」の字も正冊には龜見澄しの以後省れてあると同様である。

三七、鱧が大食とは、この魚は腹の皮を數形に膨らませる性質の形より中されての事で、今日の鱧が實際大食なるや否やといふ問題とは異なる専ら形のとへである。中るとは中毒の意。

三八、正冊にはこの箇所より「すがた」の字が入つてゐる。外觀形相の意である。前出の道具衆にも勿論味心と、もに委をも聞はしたこと勿論と解する。

三九、人間男女の本體、性別、榮養、生死の守護たる雛型の取揃へあり。即

て置く道具を何にしてよからうと、よく泥の中を見澄されますと黒蛇がゐる。

このものを引きよせて得心させて貰ひうけになりました。そして引きあげ、食べて心味、すがたを悶るに、このものは勢強く、引きちぎらうと思つても千切れぬものゆゑ、りきもつの立毛地より生えるもの、引出しの守護にしてよからうと思ひつきなされまして、さやうなされました。

それからこの人間のいのちの雛型には何にしてよからうと泥の中をよく見澄されますと、鱈がゐる。

此のものをまた得心させて貰ひうけ、食べて味、心を見て之を人間のいのちの御守護となされました。このものの数が全部で九億九萬九千九百九十九體であります。

以上で人間創造の道具衆が取揃ひましたわけで、これから兩神が親となつて、その創造の手始めをなされるのであります。

是より右に申しました龜、鯨、鰻、鱈、これらのものを寄せになりました。

そして岐魚に「いざな岐の命」といふ御名をつけて此のものの身體の眞中に男の一の道具たる鯨をお仕込みになりました、之に月さまの御

間を育成してからの全人間数ではないこの「いのち」は「いき」とほしにて連生或は隔生に「この世に生れかはり」するので、神武帝の「いのち」の理が歴代の上御一人の理にお顯現あるものもこの理によるたましいの理は必ずしも長男にのみ表はれるものでもなく、理のうけてゐない御方はその理をたけなわけてある。正冊には「人」とあり體とはない。今日の人間とまきははめため假に體と替く。此の道具衆は神格に列せられてゐない。人間の屬性として降下を賜うた守護と解する。

四七、此の一鑽の文は補入
四八、人魚ともいふ事本文第三頁参照、やさしく、「さいさま」とよぶ。
四九、正冊には國床立の命とある。次章神名のところ参照。
五〇、外冊には「人間の父とする」とある。同じ意と考へる。
五一、いざな美の命ともかく、やさしく叫んで「みいさま」ともいふ。日本

古神道の諸冊二神とは夫婦といふ外に此の兩神格は何の縁緒もない。
五二、正冊には「おも足るの命」とある。次章神名のところ参照。この場合の男神、女神の性別は今日の具體的性別のはじまりである。
五三、外冊には「人間の母とする」とある。

五四、この一鑽の句正冊にはなし。話の構成上の補筆である。
五五、「此の屋敷」とは教祖立教地、當時中山家屋敷内、現大和丹波市三島の本部域内。甘露齋は教祖天啓により宇宙元本との指示を受け給うた地點に天理王命大願成就の日、之の甘露齋が積まれ其上に就せられた平鉢に甘露が湛へられると豫言あり。宴は十三個の六角石を積み上げるのである。この齋石の地が元人類發祥としての受胎の元本である。
五六、地場とは一般には水産地、本場、この謂を生かして用ひ、本教の用語と

ます。

此の人間も五分から生れて九十九年目に四寸まで育ちました。

母親の『いざな巳の命さまは、それを見てあ嬉しや、是れまで成長した上からは五尺の人間になる』と喜ばれました。にっこり満足の笑を洩して御退隱になりました。

ところが、此の人間も親のあとを慕うて、のこらず死んでしまひました。

これから此子の魂が、虫類鳥類畜類などのあらゆるものに、八千八度生れかほりました。それで今人間はその因縁で何ものの真似でも出

来るものであります。夫れに成つて通つて来たのですから、何事でも出来るはずであります。此の年限は九千九百九十年であつてそれから皆のこらず死んでしまひました。

このとき猿が一匹丈け生き残りました。これは太初原たるの人間創造の雛型の一である。龜としてつなぎの御守護の理の示現であります。

古記ばなし

このものの体内へ男五人と女五人と都合十人が胎ることになりました。これから生れたのが人間であります。今日の人間のはじまりであります。

て用ひられてあることに一脈の推理が成立つ。而して善福寺はその墓地を管理してゐるけれどもその墓地所有の家のみならず善福寺ではない、その墓地所有者の善福寺は、中山家所屬たりしこの「はか寺」たる善福寺の外、丹波市の迎乗寺、勾田の淨國寺等各民家菩提寺であるが、それらは墓地をもつてゐないで皆善福寺の共同墓地に送葬する「はか寺」が善福寺とよむ根據を示したわけである。

七〇、正冊には「一宮二墓三はら」となつてゐる「三はら」は「腹」「原」「椀」も通ぜぬ。「はら」は「てら」「はらでら」とあり、之を「はかでら」の筆誤であるとすれば通ずる。前に「は誤とすれば、宮、墓、寺とあるべきに「みや、はか、はら」と誤記することは連想上、よくあることである。況んや「はらでら」と讀んで一體何だらうと不審に思ふ心境では「てら」とかくとこゝろに「はら」と書くのは、ありがち

の事である。分らんなりに「はら」と書いて今日に亘つたものと考へる。尙外冊には「一宮二寺三まゐり」とし三を「まゐり所」ともいふ。

七一、之に續いて四寸の理、四二の理の本文註あるも本書に直接必要な故省く。
七二、此の化生進化説はダーヴィンの進化論に通じる。御教祖がかゝる學問を修めになつた事はない。實の神様の御天啓の深遠なものには不思議と申すより外ない。「因縁」とは生活經驗。

七三、猿より現人間に進むところ亦ダーヴィンの説に合致してゐる。外冊には「女猿」とあり。

七四、正冊には人間産卸しの條の前に創造道具衆の性質神名を詳説しあり。本編の構成上、十柱の御守護を別章とせし故、上の如くに記す。

七五、最後の句は補筆。一夫一婦、一天一地を象りたる人生生活のはじめ。七六、泥の海、宇宙、地球發固分類の

この人間も五分から産れてだんだんと成長しました。そして八寸まで成長したときにはじめて泥の海が泥水高低が出来かけて来ました。このものが一尺八寸まで成長しますと親となりました。

このものが親となつて元の人數を産み揃へますときに泥の海は水と土とが分れ初めて来ました。

このときは男一人女一人と二人宛に産れました。このものが三尺まで成長したときに天地海山が分り初めて来ました。そしてこの人間が言を云ひ初めました。

このものが五尺まで今の人間と同様に生長いたしました。そのころ天地海山水土が速やかに區分出來初めました。

この人間の數九億九萬九千九百九十九人のうち大和へ産み卸したる人間は日本の地上り他の國へ産み卸したる人間は食物を食ひまはりて唐天竺の地に上つたのであります。

此の年限九億九萬年の間は水の中の生活でありまして地面に上りましてからの年限は元たる實たるの親さまの表に顯現れ下されました年より逆に數へて九千九百九十九年間でありす。

太初である。

七七、そのときに成熟成人して子を生むことが出来るやうになつたとの意。

七八、九億九萬九千九百九十九人

七九、地球殻の第二段

八〇、地球殻の第三段

八一、それで今人間がものを云ひ初めるのも「三尺とのびたときの」「三才である」と正冊に説明あり。

八二、地球殻の第四段

八三、原産即し人間の魂の理をうけたる人間。

八四、これまでは泥中、水中の生活。

八五、大和以外の日本の土地。

八六、太古文化史に、水草を塗うて移住した史實を見て天啓の偉大なるを感到する。

八七、今日の支那、印度のみではなく、寧ろ東洋、西洋の地を指す。唐とは、交那、蒙古、シベリア、天竺とは、印度、南洋、ペルシヤ、トルコ、アフリカ、地中海地方、ヨーロッパ、更に、

南北アメリカ、オーストラリアを入れ

てよい。これで世界中が兄弟である。

日本が根元で兄で外國が枝葉で弟である。枝には花蕾がつくが一時のことで根にたより、戻らねばならぬ、日本中心の理がこれより出るのである。

八八、元質の親が教祖の身によつて顯現して茲に天理王命と申されたまふ教祖第一天啓の年で天保九年西歴一八三八年を云ふ。

正冊には「四十六年以前まで」とある。本泥海古記は初天啓より四十六年目の發表であり、昭和五年より九十二年前にあたる。

八九、元質の親即古記の日月二柱の事を云ふ。九億九萬年も水中生活故、陸上の事は少しも知らぬ、それで此度親たる因縁によつて萬事を人間に教へるとの事である。

九〇、實の神様顯現につき注意すべきは、「たち」「たる」様は泥海自體に擴充しての本然の自己確認であり、次

十柱御守護の實體を天理王命様と申します、元
 定めの親様の顯現體でおはすのであります。

此の外に神名を呼ぶもの更にありませぬ。

この世のはじまりは泥の海、此の世といふ
 は夜を照し下される月様が夜をお照し下され
 たのが始まりであります。そして人間は神の
 子であります。身の内は神の借物であります。

くにとこたちの命

國床立の命さまは天にては月さまに現はれ
 給ふ。此の神さまは男神さまにて、お姿は頭一
 つ尾一條の大龍であります。此の世界の國床
 をお建てあそばして國を見定め給うた理にて

國床立命と申し、またの名を國定めの命とも御
 名がつけました。

實の親様が躬ら表へ示現下されるまでの人
 間御守護として、人徳至聖を通じて下しおかれ
 ましたのは佛法にては釋迦如來として日本で
 は傳導大師の徳として現はれ給ふ。

御守護は人間身の内では濕ひ水氣一切のこ
 と、みなこの神さまよりの借物であります。世
 界中何によらず水は先に立つものであり、水無
 くては何も出来ませぬ。是みな此の神様の御
 守護であります。

おもたるの命

を表す。神話には大龍の形とある(前
 章註三参照)。「命」とは一存在の謂

Being Deuin

三、「重足」一面足一と書く。物事足
 り充ちる理、足る重くなる、又あらゆ
 る全面に於て足り充つる理として面足
 るとなる「重足」を安當とす。神話に
 は大蛇とあらはれてゐる。「立つ」「足
 」とは實の親の双相である。天にて
 は、「月」「日」さまと現はれる。直
 に今日の日月でない。地球(人間)よ
 り見える天體中即人生に接關係の深い
 二大星としての理である。故に、實の
 親様のことを「月日兩神」「月日」と
 申すのはこの次第による。

即ち泥の海のがたは、見定めると
 「たち」さまと「たる」さまとの結合
 である。水が、水素と酸素とで出来て
 るるやうなものである。「たち」様の
 在すところ必ず「たる」様がある。即
 ち、垂直水平、天地、北南、月日、水
 熱等つねに同時同存である。

四、此の後半一續の句は補筆。

五、正冊には「此外に神といふものは
 更になし」と直截に見示されてゐる。
 六、宇宙形成のはじめ光があらはれて
 明暗が出来る、その起源の状況を、今
 日の暗夜の月光にたとへてのお話であ
 る。天文学の月日と一緒にして考へて
 は間違である。

七、人間は神の子である事、前章人間
 創造にてよく分る。身の内とは身體で
 ある。身は魂の衣物で神さまより借り
 てゐるもの故、出直し即死のときに御
 返却する。

傳導大師とは悉く傳教大師の訛か。
 宇宙界の守護座は北極星に近き北極位
 におはします。

八、具體的性別としての謂でなく能動
 の意である。性別として表はれるは、
 「突よみ」「くにさ土」の命之に従つ
 て「いざなぎ」「いざなみ」の命文け
 である。

九、人體も一口にいへば液體であると

るもので、踏張りつよく、仆れることも知らぬものであります。またその色は國の土と同じ色であります故その理にて「くにさ土の命」といふ神名をお授かりになりました。そして女の一の道具にお仕込みになりました。

佛法では普賢ぼさつ、また達磨大師、辨財天、縁結の神様などに現はれ給ふ。

この神様は人間皮つなぎの御守護であります。此世の金錢のつなぎ、よろづのつなぎもの残らず御守護下されます。

つきよみの命

この神さまは天にては「はぐんせい」の星に現

はれ給ふ。この神様は男神様にて、お姿は鯨といふ魚であります。

川魚ていへば鯉の肥えたやうなもので、勢強く妙にしゃくばるものであります。又男は宿しこみのときは突くものですから、此の理にて「つきよみの命」といふ御名を授かりになりました。男の一の道具の御守護であります。

佛法では八幡大ぼさつ。日本では聖徳太子の御徳に現はれ給ふ。

此の神様は人間身の内骨の御守護を下されます。またよろづ骨組の御守護を下されます。くもよみの命

一七、月護命とはあて字である。「突よみ」である。「よみ」とは支配。宰領をいふ、やさしくいへば「突き」様である。

一八、破軍星、今日の北斗七星即大熊星をいふ。天界では北西位の守護座におはす。

一九、雲護命と字を當てるが、漢字に意義がない。「くも」とは「くもつ」「くひもの」の意であると考へる。「くもつ」は神様の食物として人間が供へるもの。「くひもの」は人間の栄養に食べるもの。「よみ」は統治、宰領の意である。即ち飲食關係一切の御守護であり人體には消化器言語の御守護となる。やさしくいへば「くも」さま

二〇、金星、天界にては東極座の御守護。

二一、「たち」「たる」「つち」「つき」「くも」さまを人間の五倫五體といふ。

二二、髓根命と書く、字義に意義なし「かしこ」は「畏み」の意、殿正の心「ね」といふの中心意義がある。

「ね」とは「音」であり「空氣」の傳導によるエネルギーの發動である。従つて「息」にも通じる。やさしく呼ぶには「ね」さま。

二三、正世には「ひつじさるの方に集る星」とあり、星名は表はれてゐるな

であります。

このものは人が食べると中毒るものゆゑ、人間の死生の御守護となし給ふ。人間が此の世へ生れるとき十月になれば母親の胎内にて親と子との肉つなぎの縁切の御守護を下さるゆゑに子が生れるのであります。

死亡のときは此の世のつなぎを切つて下さるゆゑに來世へ出直すのであります。

またこのふぐは腹の大きいもの、そして人間も大食すれば腹膨み壽命が縮まるといふ。且つこのものを食べると中毒つて命を縮める理にて大食てんの命といふ御名が授かりました。

佛法では虚空藏ほさつ鬼子母神などに現はれ給ふ。

この神様は縁つなぎ切りの御守護にて鉄のやうによろづ切り放しの御守護を下されます。

おほとへの命

この神様は天にては宵の明星と現はれ給ふ。この神さまは男神さまにて、お姿は黒蛇であります。

このものは勢強く引千切つてもちぎれぬものゆゑ、力物立毛よろづ引出しの道具に使はれました。

引出すには苦勞し眞黒になつて働いて仕事

さまを以つて宇宙人生構成の御守護として、「天神七代」と敬稱せられてある「七代」に文字は通じてあるが「七森」の意を妥當とする。また當時民衆のために、讃仰の唱名「な、む、あ、み、だ、ぶ、つ」と七音にあて、説かれてある。

三一、大戸邊命と文字をあてあり、文字に意義なし「おほとへの命」とは「大手伸」である。「大きく伸展する」の意である。やさしくいへば「のべ」掬である。「引出し」の御守護である。

三二、金星、天界の御守護は西極位である。天文学上、曉の明星と同一星であるけれども、天文学と一精にする必要ない。日、月も勿論天文学上とは別であること申すまでもない。宵の明星は宵の明星であつて晨の御守護（くもさま）とは違つて差支ない、又それで賦に結構である。

三三、力物とは食物、立毛とは穀類前

章註参照。
三四、商人にかがらす工業手工業農業者等一切の實業を申され、専門の熟練を要する職業を申される。

三五、正冊を稍、整へて記す。

三六、黒、苦勞、玄人といふ言語の文であるが、中々味の深い用語である。外國語でも Labour (ラテン語勞作する) laboration (英、佛語努力、Labour (勞働する) Laborator (研究所)といひはたらいて熟練を積むことに文字にても示してある。

三七、牽牛星、天界の御守護は天頂に近き北西座。
三八、伊佐奈岐命ともかく。「いざな」とは努力を現はす感動詞である。「き」即ち「きい」様である。「岐魚」のお姿より來たる御名にて、人間の男の原隲夫の理といふより外に、日本古神道とは何の聯絡もない。

三九、父親の大理は「たち」掬であるがその理をうけて具體的に人間うみ下

このものは今の人間の肌委心も眞直なもの
それで之を雛型として人間の苗代に使はれま
した。

これは人間の母親にて日本に在す伊勢の外
宮様の理に現はれ給ふ。伊勢の大神宮の外宮
はこの神様の理であります。

人類が産れ出てたる根本の苗代の御守護て
あります。

右都合十柱にて元實たるの親さまが顯現十
全相として實の御守護を下されましたのであ
ります。そして躬らを天理王命と御名指致さ
れました。それで天理王命様とは元の十柱十

作用の總名總體にて此の神様こそ無い人間な
い世界を拵へるにつき使うた道具衆に神名を
さづけて世界人間身の内の御守護となされま
したのであります。

ことにより教祖の御名が「美伎」とあ
るより美の字をあて、用ふることにな
つたのであらう。

四三、日本古神道丈の考より見れば
これも「いざなぎの命」が内宮様の理
のあらはれと同様奇妙に聞える。外宮
様が伊弉册尊といふ事になるがこれ
もあくまでも日本古神道の構成を離れ
て考へねばならぬ天理神話である。只
その御守護の理が昔にかく示現下され
たのである。本教の「いざなぎ」「い
ざなみの命」即「ぎい」様「みい」
さまは古神道の夫れとは明確に獨立し
て考へねばならない。

「みい」様は人間の母親として妻の理
としてのあらはれであり、人間の苗代
尊であらせられる。然るに、日本古神
道の外宮様は豊受大神即ち豊毛大神で
人間生命の糧力物、一切の御守護神と
伺つてゐる。さすればやはり人間成長
の苗代の理に掩有せられるものであつ
て、本教では一歩進めて、之を端的に

人種の苗代自體と申され、立毛の御守
護として「のべ様」と示現せられてあ
るので、此間何の反對も不一致もない
世俗一般に外宮様を「苗代の御本尊」
と申してゐるのは事實である。「作物
の苗代の御本尊」を農業に止めず、人
間創造の大業の理に還元してお説きに
なつたのであつて、本教話の「みい」
様の理は正に日本古神道の外宮様の
御守護の理の本と同一であらねばなら
ぬ。

天理教々典に、神名を古神道日本書
紀の用語と同じきものを用ひてある次
第は本誓「はしがき」に委し。

心一すぢの者である。此の心魂を月日の神さまが確
 と受けとり見澄されるところによれば此の人間の魂
 は「いざなみ」さまの御たましひを人間體に生れさせら
 れたものであつて、四十六年前に元實の親様が天降り
 あそばされ、その體内を神の屋代と貰ひうけたまふ。
 『みき』の心魂が元實の神様の御心に叶うたゆゑ、みき
 を以つて天理王命と神名を稱へさせ給ふ。然るに何
 分人間體の事ゆゑ、この屋敷に『みき』の身代の理を以て
 天理王命と神名をお授けになりました。この屋敷こ
 そ宇宙の龍頭、世界の臍であつて、太初宇宙が泥の海の
 ときより人間胎し込みの元たるの地場であるの理を
 以てかく地名に神名を授け給ひました。それからま

四、元實の親神を云ふ。

五、註三参照。初天啓は天保九年十月二十六日。

六、御教祖の御名、美佐ともかく。

七、以上は教祖の口より實の親様の御意をお傳へになつてゐる。

以下は實の神と御教祖との合體の御言葉である。即ち天理王命の御言葉である。

た甘露臺を建てるのは、人間胎し込みたる地場で、元十
 柱の神のいはれ、かたちによつて據るのである。

世界中の人間の心が澄みきつた以上は、その甘露臺
 の上に平鉢が載り、その鉢に食物を供へられると、夫れ
 に甘露を授けられるのであつて、之が人間の壽命藥と
 なるに仰せあります。

此の度は人間の仕込相すみましましたゆゑに、且つまた
 人間元産み出したる人数にあたる年限も相すみまし
 たゆゑに、元實の神さまの魂を此の屋敷に人間として
 現はしてある。そして此の屋敷は人間胎込みの地場
 であるゆゑ、人間の親里であります。

抑々太初人間創造の時にあたり、その雛型道具を揃

八、此の六行整理による後段よりの挿入。十柱の神とは根本兩神と人間創造の道具衆の八柱の神と都合十柱

九、體育、智育、徳育の事。
一〇、九億九萬九千九百九十九年。
一一、御教祖

一二、第一章註一〇参照。
一三、あそび、遊山とも外冊にあり。

界中の人間は兄弟姉妹である。かく仰せられます。右の御話をお傳へ下されるのは右申しました「みきさま」即御教祖様であります。この御方は人間心は微塵も無く、また人間心として何の覺えもなくして、元寶の親神様が入り込み旬刻限の理——宇宙人生創造の時より子數の年限九億九萬九千九百九十九年満ち足りし日の到來——によつて、この御話の時より四十六年以前より今日に至りても、なほ斯くお話をお取次ぎ下されるのであります。

また十柱の神さまの魂を一人の人間に憑つて現はれることは、何事によらず教へがよく説き流布される事が出来るものであります。

老母に赤き衣服を着されるのは天しよりの如く、月日天に表はれて照すの理で之は二神の眼である。目はおかく、それゆゑに社に赤きものを着せて赤き中に月日こもり入るから、何事でも見えるのである。それ故にその他の衣服を着せると身が苦しくて着てゐられぬ。

此の社も同じ人間なれども、此の者は元の親の「いざなみの命」の御魂なるゆゑ、何の事でも、どんな處のものでも、断け度いばかりの心であります。此の者を雛型として、月日の神入りこみ、たすけ教へることであるから、世界中の者も親里へまゐりて、親にたすけを貰ふと思つて、心を入れかへるなら、たすけは勿論のこと、善

一六、何一つ人間心の私慾の下に言行せられた事實も経験もないの意である。

一七、本書作成の年より四十六年前即ち初天降（天保九年）の年よりの意である。

一八、之の「赤衣」のお話は編整により茲に收容す。老母とは御教祖自らを神様より見て第三人稱に用ひられて人間の母たるの理を明にせられてある。社ともいはれてある。
一九、月・日、即ち「たち」
「たる」様であつて天理王命の根本屬性を申されてある。

二〇、あかく、赤と明（あか）とをかけたものがある。

天しよるとは日本古神道の天照大神の御徳のやうにわかりやすく、くまなく慈悲の治きを云ふ。

十柱の御守護「いざなみ」様の尊参照。
二一、教祖傳にあるとほり赤衣以外、御教祖が召され

て來たときは病に現れて心得違ひをお指示し下されます。心得違ひといふのは、『ほし』を『し』、『かはら』に『く』、『うらみ』は『ら』だち、『よく』に『かうまん』の八つ。子供が十五歳になるまでのうちの悪や不幸は皆親のほこりが子に現はれていけんするとの仰。十五歳以上の悪惱み災難みな第一家内中のほこりつもり重なる故に親神様よりの意見立腹をうける。この意見立腹も憎さてはない、一すぢに助けたいばかりの親心から心を直すためのこと。此の親神に助けを頼む以上は親神の教の通りに家内のこらず先づめい〜に自分の通つて來た十五歳よりの心得違ひを眞實より懊悔して此の後は日々常の心にうそ『つ』いしよ、『よ』

三、不足、吝嗇、偏愛、憎悪、怨恨、忿怒、邪念、高慢。

四、さんげ、心中神に對し赤裸々に心得違ひをわび、之をくりかへさぬ事を誓ふことで、口を開いて他人に申すことを必要とするのではない。

五、嘘、へつらひ、邪念、高慢。

六、以下の八行、編整し茲に收む。

七、人間生死の理の説明。

く『かうまん』のない様にして人を助ける心と入れかへて親神におすがりすればその心を親神がうけとり給うて萬何事のたすけを下されるのであります。かくては人間には病もなく薬もなく毒もなくありません。今日人間の病といふものは皆心からであります。人間が死に行くといふてゐるが必ず必ず死んでしまふのでなくそれは身の内より御守護下されてゐる神様が御退きなされるのであります。恰度衣服をぬいでしまふのと同じわけであります。又出直して行くのも古衣をぬいでしまふのと同じであると御教へ下されてあります。

も勇んで下されて御守護下される。それで人間身體に悪しきことの教け願ひのためにこのお勤めをするのは、願人は勿論勤め人みな眞實心からのたすけたいとの心を以てお願ひせねばなりません。

人間身體は親神様のかしもの、それ故その身體は親神様の自由用たすけ。これをよく思案して見なされ。『胎産ゆるし』は此の屋敷へ願ひ出るときは、産婦には腹帯も要らぬ凭臺も要らぬ。七十五日間の毒息もいらず、身には汚穢もなくなるの御ゆるしを頂けます。そして平常のとほりに暮してよろしい。このおびやたすけは元々人間創造の證據に萬たすけをするの道明けてあります。

また、この先は人間の心を澄まして、病まず、死なずの助けの道を教へる。又願ひの通りに叶ふやうにとそのたすけの御守符を授ける。疱瘡せぬやう請合の御守符、悪難除けのお守符も授けるとの仰であります。百姓たすけは芽蒔符、蟲掃よけ符、成就の符、肥授であります。肥授けといふのは糠三合、灰三合、土三合都合九合調合して材料となります。これが肥のつとめにかけて授けると普通の肥料一駄の効果があらはれるのであります。これが皆願ひ出るに従つて授けられるのであります。

それで元實の神様が仰せられますには、凡そ人間のこと、なすことを神が教へたのであるとは誰れも

一、懐胎、出産の御守護のことにて屋敷とは教祖の御本部のことである。

二、人間の定命百十五歳と仰せあり、それまでに中途にて死なぬこと。
 四、當時天然痘は不治の大難病であり、教祖天啓前、他人の子を引とりて之の難病を信心にて平癒せられた事、教祖傳の大事にて大慈の親神様の現れたまふ、教祖の魂の因縁を説明する主要史實であります。此の場合一切の難病業病と讀む。
 五、五穀豊穡成就。
 六、車一臺四十貫、
 「おつとめは百駄分のさつけ料について行はれる」とあります。

人間は知らないであらう。それも其の管で人間を拵へたれども是れまで人間に入りこんで、口を藉りてその人間の言葉で教へたことはなかつた。今がそのはじめのことゆゑ、その實を知つてゐるものは無いわけである。

それで嘘と思へばうそとなる。神のいふことを眞實と思ふて願へば、をがみ祈禱や藥飲まなくとも話一條で皆助かること、これが何よりの證據である。

かくお教へ下されてあります。

泥海古記 附註釋 (大尾)

七、是までとは御教祖の天啓があるまでの筈、この人間とは教祖の身體をいふ。人間の口をかりて、教祖の口をしていはせる。
八、神の大自然用であり。人間がうそと思へばうそとして人間はあらはれてくる。
九、藥飲んではいけないのではない、病をなほすのは色々の方法がある、藥のむのはその手段である。この道は「醫者の手あまりを助ける」とある。

昭和三年十月三十日 刷
昭和三年十一月五日 行
昭和四年一月廿六日 再版改訂發行

昭和五年七月五日 改訂三版發行
昭和六年九月廿六日 改訂四版發行

奈良縣丹波市町大字丹波市五〇

著者兼 發行者 岩井 尊 人

奈良縣丹波市町大字川原城三〇九

印刷所 天理教教廳印刷所
右代表者 東井三代 次

版權
所有

奈良縣山邊郡丹波市町大字三島八〇番地

發行所 天理教道友社

總發行所 東京一三八二二
大阪二八四二一